

はじめに

つくづく、被災され、他界された方、その家族にお悔やみ申し上げます。悲惨な体験をされつらい思いをされ、本当にこんな災害がなかったらと、悔しく思います。

申し伝えたいことが他分野にわたりまとめきれず、以下箇条書き（発表会で話す内容）

名鉄の番線を間違えたり、ホテルを間違えたりと珍道中が進む
行程がうまく行き充実した視察だったのは、初日に、今度講演を頂く小湊さんの同行
佐々木くん（元かかみの包括）が二日目、三日目とも同行で運転、案内、仮設住宅まで引き込んでくれたからとても深く話が聞くことができた事に感謝

講師の紹介

小湊さん福島原発から 70 km圏内に住んでいる。「海外では 100 kmが規制。放射能はあきらめた」

ケアマネ協会の事務局、独立社会福祉士事務所

主任ケアマネ、ケアマネ基礎研修などの講師を指導する講師

想定を超える大規模災害は出来ることからやればよく効率も何もない

宮城県独自のアセスメントを開発し、サービス導入の根拠にこだわって指導

ケアプラン作成時のアセスメント力や介護保険だけでなく総合相談能力のスキルアップを日頃から意識した研修が震災時役に立ち、希望だけでなく生活全般を見る視点、悪化の可能性、ケアの必要性、権利擁護の必要性などを意識・判断する視点を日頃から持ったこと、また宮城県内は共通のアセスメントシートを日頃から使い、主要な研修においても一括した共通の指導・教育体制をとっていた。震災時は被災者向けのアセスメントシート（避難所被災高齢者アセスメント表）を作成し、14日後にはそれを用いてアセスメント開始すると同時に緊急入所の必要性など検討。

講師の小湊さんは、震災直後から弁護士会や社会福祉士会と共同して、総合相談窓口をずっと継続開設している

行程の報告

行程 初日

名取市閑上地区 南三陸町防災対策庁舎 女川 石巻市 日和山公園 東松島市社協にて
仙台 宮城県内ケアマネ指導者と座談会 座談会の反省会 26時まで

行程 二日目

松島 日本三景の被災状況を船上から視察 石巻 石巻復興センター（仮設市場）にて
石巻市稲井地域包括支援センター 反省会

行程 三日目

佐々木さんの仕事先のフェアトレード東北の事務所に挨拶 仮設住宅の調査に同行
炊き出しに参加、コミュニティーを作る目的

現場からの報告

「あの時何が起こったか」から現在の状況

閉上地区、女川、石巻ともに地盤沈下しており、時々水が湧いてくる、状況があり土嚢があちこちに積み上げられている

川の水面も地盤沈下の為か、不自然なほど水面が高く異様で不気味な感じが、沿岸部の川のほぼ全てで見られた。また、満潮時に海水が浸出する地域もあり、ポンプなどで海水を汲み上げているが、盛土の費用や潮に浸った土地など、人がいなくなるのに十分な条件が今もなお揃っていた。

当日は感じなかったが震災当時匂いが各所激しかった。とりわけ鯨の肉を冷凍保存していた冷蔵庫街だった石巻市の海岸沿いは、激しい腐敗臭が漂っていた

現在はかなり修繕されたが、ついこないだまでは瓦職人が不足していてビニールシートでの屋根が散見されていた。

ある特養では隣接する施設に高さを求めて避難したが、警察に指定避難所である小学校へ避難するように指示を受け移動したが、その移動の際に津波の被害にあってしまった。

被災の当日、それぞれのエピソードは安倍さんの資料より確認してください

東松島市の安倍さん(松島医療生活協同組合)に話を伺う。1F ディと2F に居宅の事業所。

振りかえれば反省することしきり

野蒜地区で体育館が避難所だったけど、その体育館にまで津波が押し寄せ、入り口が一つだったから、洗濯機のようにぐるぐる津波が渦を巻いた。

防災無線が聞こえず、自己判断でディの利用者を3台の車に分乗して逃げる。1台は津波をまともに受けて、引き際の渦に巻き込まれ全滅、1台は、うまく小学校側に押し流されたが運転手以外水没で他界。1台は小学校側に押し流され2階に漂着し全員助かる。

所長は事業所に残り歩けない方、車いすの方とスクラムを組んで残ったが、死亡。二階に連れあがった人は助かる。

安倍さんは利用者と歩いて高台へ移動中津波にまともにあう。最後に「安倍さん」といって利用者さんから手を差し伸べられたけど、津波にのまれたその残像がいつものこっているが、たまたま家族からお世話になったと最後いわれ、心穏やかになった

今思う良かったことは、パソコンが2階にあり(ノート)利用者情報が見れて、それをもとに安否確認ができた事。

その後、リストを作り、120名分の利用者名、自宅か避難所か、亡くなったかなどを手書き

で作成。散り散りだけに安否確認（避難所を訪問）、死亡確認（台帳をくまなく確認）まで1カ月以上かかった。

避難所から福祉避難所へ1週間程度のうちに自衛隊などの協力で低体温の方、DM、など移送してもらった

周囲が他界したことで自己嫌悪、いまだ抜け出せない方も多くあるが、津波が来るけど避難するかどうか、生きるか死ぬか、という状況においても、選択肢があり、私は避難しない、私は、これでいい、という自己決定があった

あと、避難する際に何処へ避難すべきか、また避難経路にも迷ってしまった。教科書通りの消防訓練はしていたが津波の避難訓練はしていなかった。今振り返れば、迷う時間がもっと短ければもっと良かったのではないか・・・。

仮設住宅の現状

パチンコ業界が一番うるおい一番、早く復興した

一晩で45万円突っ込んで、義援金・支援金を巻き上げられた方がいる、そういう心境に陥り、先が見えない状況が続いている

ある日、台湾からの義援金があり、3万円一律で配布した。その足でパチンコに行った人が多く、パチンコの駐車場には義捐金配布の封筒がかなり捨ててあった。

現在の仮設住宅や避難所も長期化してくるとおかしな感覚が蔓延し、被災者の自立支援を妨げている。毎回無料でもってきてもらえる弁当の廃止は反対！生活保護を受けたら抜け出せない構造に似ている

佐々木さんから聞いた話だが、タイランドからきた取材の人が、震災後仮設住宅の悲惨さを伝える目的で来日。その方の印象は、トイレ付、風呂付、エアコン付きでどうして悲惨な生活？これじゃあタイ国内で上映できないと話が出たこともあった。

現在の問題として、仮設住宅ではアルコール中毒、ギャンブル依存が最も顕著な問題

仮設住宅群により自治会がある無しでのごみの問題、見守り支援など不十分

石巻の行政力が弱く、市長もみんなの前で殴られたとか。

ニュースで報道されなかったこととして、三日目の水が引き始めたとき1000体の遺体が石巻に打ち上げられていたこと

震災直後、避難所での生活の時期（被災後数か月）は海外からの窃盗団が横行しており、避難した空き家を狙いテレビを持ち逃げしていたり、銀行が襲われたりしていた、殺人もあったが不安をあおるためかあまり大きく報道されていなかった

避難所の治安は安定していた。何も盗まれるものはなかった。

想像を絶する大きな災害に対して効率良い悪いかもなく、地域のケアマネは自己判断できるところから自分の利用者の安否確認を行った。実際周囲と連携しようにも電話がつか

がないんだから

支援物資がたまりレンタル倉庫に入れてあるが費用が掛かるため廃棄している現実もある。

仮設住宅は、本当に家がない方もみえれば、1階は水につかったが、二階は使えるため、自宅の二階に住み、仮設住宅を物置に使っている人もいる。

仮設住宅は向こう5年程度存続。家賃無料。光熱費実費。

今後このような大規模災害は無いだろう。普通は電話が通じ安否確認はすぐに行える

公立病院の近く、行政の近くは電気の復旧が早い

デイに一般人が押し寄せ、ケアが必要な方に対して十分な対応ができなかった

行政の考える平等と現場での平等、公平は違いがあり、支援物資が人数分ないからと配られなかったことがあちこちであった

この地区は海からの津波、定山堀（ていざんぼり）からの水があふれ両側から攻められた。

堤防横に瓦礫とともに多数の死体が溜まった。

民生委員さんも被災して仮設住宅にいる被災先に民生委員さんが戻って支援していたが限界があり、佐々木さんの団体が、民生委員さんと顔つなぎして見守り支援している

仙台市は46か所の包括

反省会の中で、被災地に来るということで現状を分かってもらえる人が増えればそれでいいといわれた。

たくさんのお事業所が複層的に安否確認を起こっていたかということ、そうではなく、できた事業所もあればできてない事業所も多数あった。

「今からできること」

事前想定 of 取り決め（誰が何を担当するか）

安否確認の優先順位 重複せず・効率良く出来る？ 決め事と協力

- ・安否確認をする人（ケアマネはケアマネ業務を！デイは？訪問は？）
- ・地域包括支援センターのバックアップ体制（ケアマネなど） それを想定した総合相談能力のスキルアップ

複層的に情報が得られる方法

避難所の区割り、自治（必要な人に必要な物・場所・支援、トラブル防止とストレス軽減）

- ・福祉避難所での要介護者と一般の方との区切
- ・アセスメント（キーパーソンの死亡、環境の変化、収入・借金など被災時に想定される特別な問題を含む）の人・物・ルール・協力体制
- ・緊急入所の体制及び緊急入所先となる施設の準備（場所・スタッフなど）
- ・緊急入所後から退所に向けたアプローチと支援体制

周囲とのつながり（メールアドレス、携帯アドレス、SNS）関係者・機関との訓練

日頃からの担当者、役員との顔の見える関係作りとそれが出来る意図的な仕組み

保健所、福祉団体、弁護士会、各務原市、岐阜県、大学 学生 ボランティア NPO

隣接地区との連携

緊急車両と市との協定、ガソリン

パソコンデーター バックアップ

各団体のアセスメント様式の統一

ケアの理由を明確にする専門性

講師の小湊さんは、想定を超える被災、通信手段のつながらない状況では、各自ができること目の前のことを各自考えて行動する。それに尽きる。連携しようにも連絡方法がないのだから。

施設が被災するとももちろん施設も人が足りないから、補充のために訪問側のケアマネなり訪問ヘルパーは施設内に取り込まれがちだが、災害発生すぐには、やはり安否確認のために必要な活動を行うという最初の取り決めを各事業所でやるべき

安否確認の優先順位を決めておくべき。独居、老々は優先度が高い。要介護3 4 5が高いわけではなく、ライフラインが停止した状態ならエアーマット、吸引、HOT利用の方の優先度が高い

防災無線が届いたところもあれば届かなかった地区もある。6mの津波情報が途中で20mに変更された、その情報の得る方法に対する準備、東松島市野蒜地区ではスピーカーが地震の揺れによって切れた。切れないような体制、防災無線だけでなく複層的に情報を得られる方法を考えたい

今できること避難所の区割りを事前に行い、その区割りからトイレが近いほうがいい人の優先エリアを決めておくことは今からでもできる

電話回線がつかない、SNS（FBやツイッター）、携帯メール、パソコンメールは早くつながった。隣の人携帯アドレスを交換すべし

行政や他団体、近くの保健（保健所）、医療、福祉関係団体（・・・士会）弁護士会、警察、消防などと事前に顔が見える関係を作っておくことが有事に役に立ち、たとえば個人情報保護をホイと有事に渡せるかどうかの判断は日ごろの活動にかかっている

大学との連携も有効で、日ごろからお互いの活動を知っておき、協働しておくことで有事の際にお互いの力が引き出せる。

隣接県の応援を早くに取り付けた部分は大きく、宮城は山形、福島は新潟、岩手は秋田、社会福祉士会、ケアマネ協会などが総合相談を行う際に人的派遣をしてもらっている

他市町村との職能団体レベルの連携について。同時多発的の地震を想定しながらも、被害の状況に差は生じるわけで、お互いに起こった時に支援し合える関係を日頃から作っておくことも必要なこと。

緊急車両を事前に登録（岐阜県警）などにより、有事の際に活用できる車両を確保する、市役所と協定を結ぶなどして有事の際の役割を明確にしておくことが有効

パソコンデータをバックアップまたはクラウド対応などで有事の際に必要な応じ引き出せるようにする。必要な紙媒体で取っておくことも。